

人権コラム(第51回)を担当する、人権・地域教育課です。

先日、新聞を読んでいたらコラム欄に「森毅」さんの名前が出ていました。「はて、この名前なんて読むんだっけ。」飄々(ひょうひょう)とした話しぶりやお顔はしっかりと浮かぶのですが、お名前の読み方がでてこない。「最近こんなことが増えてきたな。」と考えつつ「もりつよし」さんのことを思い出していました。

京都大学の教授だった森毅さんは、数学者でありながら、自由に軽妙なエッセイを数多く遺しました。私がよく覚えているのは「一等賞にならんでええ、びりにならんでええ。まあ、真ん中へんでぶらぶらしてたらええ。」という言葉です。「急げ、急げ」と後ろから何かに追いかけているように感じていた時に息を抜く隙間をくれるような言葉でした。今の世の中は、「何のためにやるのか」「どんな成果がでるのか」ばかりを気にしているように見えます。時間を無駄にせず、勉強や仕事でどんどん結果を出すことだけが、正しいことだとされている雰囲気があります。しかし、このように「スピードや結果」ばかりを追い求める社会は、知らず知らずのうちに私たちの心からゆとりを奪い、「人とは違う人」や「ゆっくりな人」を認められない冷たい空気を作っているようにも感じます。「役に立つか、立たないか」というモノサシだけで人間を測ろうとすると、そこには一人ひとりの大切な価値を傷つける「人権の危機」が隠れています。そんな息苦しい時代を生きる私たちに森さんは「ぶらぶら生きる」というヒントをくれました。

森さんの言う「ぶらぶら」とは、単なる怠惰や無責任の勧めでは決してありません。一つの目標やルールだけに縛られず、寄り道を楽しみながら、あえて「まわり道」をして生きるというしなやかで賢い知恵なのです。一つの正解に向かって一直線に突き進むのではなく、目的のない時間をのんびり楽しむ。この「心のすきま(余白)」こそが、人間が人間らしく生きていくために、とても大切なものだと思森さんは教えてくれているのだと思います。人権を守ることの基本は「どんな人も、ただ生きているだけで価値があり、その価値は誰にも傷つけられてはならない」ということです。何かができるから偉いわけでも、社会の役に立っているから生きる権利があるわけでもありません。ただ生きている、それだけで誰もが大切にされるべき存在です。でも、効率ばかりを気にする社会では、「役に立たない」と思われたものや、「みんなと違う生き方」が仲間はずれにされてしまいがちです。森さんの「ぶらぶら生きる」という姿勢は、そんな「役に立つかどうか」という狭いモノサシに対する抵抗だったのだと思います。ぶらぶら散歩している途中で見かける何気ない出来事に感動があるように、一見すると無駄に思える時間や、みんなと同じ枠にはまらない生き方にこそ人間の豊かさや個性が詰まっています。自分が目標に向かって一直線に走っているとき、人は他人の遅れや寄り道に対して、「なんで早くできないの?」とイライラしてしまいがちです。反対に、自分自身がぶらぶらと歩いていれば、同じようにぶらぶら生きている周りの人を見ても、「それもいいよね。」と認めることができます。「ぶらぶら」とは、自分と相手の間にちょうどいい「心のゆとり(間)」を作ることでもあります。ガチガチのルールでお互いを縛りあうのではなく、「ちょっとくらいのズレや違いは気にしない。」という緩さこそが、偏見や差別をなくし、お互いの人権を大切にしあえる土台になるのだと思います。

誰もが「優秀な人間」や「役に立つ人」であり続けなければならない社会は、とても息苦しく、何かのきっかけですぐに壊れてしまう脆(もろ)さがあります。なぜならそこには、「一度失敗したり、立ち止まったりしたら、もう社会から見捨てられてしまうかもしれない。」という怖さがあるからです。森さんが遺してしてくれた「ぶらぶら生きる」というメッセージは、現代の私たちに「もっと肩の力を抜いて、まわり道を楽しんでいいんだよ。」と語りかけてくれている気がします。誰もが急ぎ足にならず、ときには立ち止まり、ぶらぶらと歩く権利がしっかりと守られること。それこそが、本当の意味で人権が大切にされた、誰もが生きやすい優しい社会の姿ではないでしょうか。